

# 書写力向上をめざして

## —基礎・基本とその応用—【第34回】

### 「書写の要素」について ㊦ 〈字形(17)〉

山梨大学大学院教育学研究科教授

宮澤 鷺州

漢字は先月号までに取り上げた左右の組み立て文字をはじめ、上下・内外の組み立てによってできています。今月号では、左右の組み立て文字に次いで数が多い、上下の組み立て文字を取り上げます。



#### 字形の整え方 (十六)

今月号から、漢字の「部分相互の組み立て方」のうち、上下の組み立て方について、見ていきます。

#### (1) 上下の組み立て文字について

上下に組み立てられる漢字は、冠<sup>かんむり</sup>や脚<sup>あし</sup>などの部首が、漢字の一部として捉え<sup>とら</sup>えられる場合(ウ冠・

雨冠・草冠・連火<sup>れんが</sup>など)と、部首そのものが上下に分けられる場合(青・金・舌・長など)とがあります。

上下に組み立てるわけですから、単独形は扁平<sup>へんぺい</sup>の形に変化することになります。それとともに、点画<sup>てんかく</sup>の形を変化させたり、全く異なる形に変化させたりする場合もあり、左右の組み立てと同様、様々な変化をすることで複数の部分を一つに見せる工夫が施されています。

次に、上下の組み立て方のポイントを挙げてみ

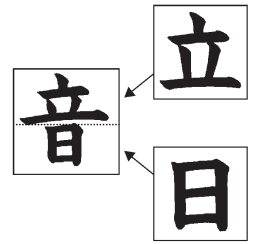
ましよう。

①単独形が上または下に位置する場合、扁平にしたり画間<sup>かくかん</sup>を狭くしたりする

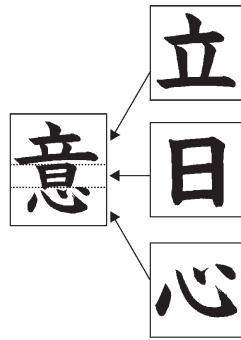
例えば、「音」は、「立」と「日」の組み立て文字です。「立」を扁平にして下部のスペースを広くとります。「日」も画間を狭くし小さくまとめることとなります。

同様の文字例として「男・買・岩・昔」などがあります。





なお、「音」を部分とする「意」の場合、「日」は小さくなるだけでなく、扁平の度合いが強くなり、左右の縦画は内にすぼまる方向になるので注意が必要です。



②単独形の一部の点画を変化させる

背の高さを縮めるための工夫として、点画を変化させて対応する場合があります。その代表が「雨冠・尚冠（部首ではありません）・ウ冠・ワ冠」などです。

○「雨冠」の変化

冠の代表とも言える「雨冠」の変化を見てみましょう。背の高さを切り詰めるために、二画目を

点（左下方向）に、三画目を横画（終筆をはねにする）にそれぞれ変化させています。



なお、「雨冠」の二画目を内側に向ける書き方もありますが、「雨」の二画目の縦画方向に引きずられているせいでしょうか、極端に右下方向に向ける字例を多く見かけます。この方向の点では、冠の内部が狭くなり、五画目以降の点が窮屈になるので注意したいものです（図A）。



また、横画のはねを、左払いとする見方もあります。左払いと見なすと、この画は折れて左へ払う複合画となります。とすると、カタカナの「フ・ア・マ・ヤ」などの一画目と同様になり、長すぎてしまいます。したがって、私は横画のはねと捉えています（図B）。



さらに、「雨」を冠として書いているにもかか

わらず、「雨」の形を圧縮しただけの字形も見かけます。大学生の調査では、一〜二割ほど出現します。楷書完成前の北魏の時代には、間々見られる書き方ですが、今日の漢字の字体としては不適切なので注意が必要です（図C）。



因みに、部首ではありませんが、「雨冠」と同様の变化をする冠があります。それは「尚」で、「常・堂・党」などの文字の冠になっています。便宜的にこれを「尚冠（しょうかんむり）」と名付けることがあります。「尚」の四・五画目は、点、横画（はね）になるので注意しましょう。



○「ウ冠・ワ冠」の変化

「ウ冠」や「ワ冠」は、カタカナの「ウ・ワ」と似ていることから名付けられた部首名です。本来、カタカナは、漢字の一部が文字化したもので（ウは「宇」の冠から、ワは「和」の「口」から。異説あり）、変化の順番からすれば逆なのですが、便宜的に「ウ・ワ」の形から、それぞれの変化を

見ることにします。

カタカナの「ウ」の二画目は右下に向かう点で、三画目は折れて左へ長く払います。これが「ウ冠」となると、左下方向の点、横画（はね）へとそれぞれ変化します。「ワ冠」も同様の変化と見ることがができます。

「ウ冠」または「ウ冠」の形を持つ漢字数は多く、小学校で学習する漢字として39文字あり、「ワ冠」または「ワ冠」の形を持つ漢字数は29文字あります。

ウ ↓ 家 宮  
ワ ↓ 写 軍

なお、「ウ冠」と誤って認識されているものに「穴冠」があります。「穴」が冠になっているので「穴冠（あなかんむり）」と言います。字例として小学校の学習漢字としては「空・究・窓」があります。変化としては、四画目の左払いが短くなり、角度が45度から30度ほどに、五画目が曲がりへと変化します。この際、左払いと曲がりのそれぞれ始筆の位置は、三画目の横画の方向と揃えそ

えます。また、それぞれの下部も同様に揃えます。

穴 ↓ 空 究

### ○「竹冠」の変化

「竹冠」では、単独形を圧縮させるための工夫として、左右の縦画を点に変化させます。三画目を右下方向の点に、六画目の縦画（はね）を左に短く払う点へとそれぞれ変化させます。

「竹冠」の漢字は、小学校では14文字あります。次に、全ての文字を抽出しましたので、参考にしてください。

竹 ↓ 笛 算 答 第

等 箱 筆 管  
笑 節 築 簡  
筋 策

「竹冠」は、相似形の「ケ」が左右に並ぶので、横幅が広くなりやすいのですが、字例を見渡すと、

「竹冠」が最大幅になるのは「笛」のみで、残りのは、ほぼ同じか、「竹冠」より幅が広くなっています。意外とコンパクトに書かれることを確認しましょう。

### ○「草冠」の変化

「草冠」はその名のとおり、「草」の冠からの命名です。カタカナの「サ」の三画目を短くして縮めた形と捉えることができます。

二画目は、ほぼ垂直に立て、三画目は横画と交わるところまで垂直に書き、それを過ぎたら左方向に払います。また、二・三画目は横画を三等分割する位置で交わります。こうすることで、下部との組み立てがうまくいくのです。二・三画目の方向が「V」字形にならないように注意しましょう。

サ ↓ 花 茶 苦 英

なお、「草冠」は、漢字字典の部首では、六画の「艸」に位置づけられています。簡略化されて、今日の「サ」形に変化しました。「艸」はそもそも「草」の意味であり、これが部分として付く漢字は植物に関係する漢字ということになります。

○「人やね」の変化

「人」を冠とすることから「人やね」と名付けられるもの、「入」を冠とすることから「いりがしら・いりやね」などと称されるものがあります。

「人」の字形は、二画目の右払いを一画目の左払いの送筆部のほぼ中央に接して書きますが、「人やね」の右払いの始筆は、左払いの始筆部のやや下に接して書きます。角度はそれぞれ45度で、「人」と大きな差はありません。下部との組み立てにおいて、次の字例からもわかるように、「人やね」の内部には一画のみが入るように組み立てられます。



また、書き文字としては「人やね」と全く同じ形、書き方ではあるものの、部首では区別されている漢字として「入りがしら」があります。該当する漢字は、小学校で学ぶ漢字として一字のみ「全」があります。

なお、「全」の上部は字源では「入」ですが、部首は「玉」で分類されます。

説文解字



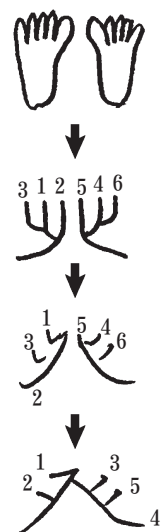
○「発頭」について

冠の一つに、「発頭（はつがしら）」があります。小学校で学ぶ漢字としては「発・登」の二字のみですが、「発表・発見・発明・出発・登校・登山・登場」など、学校・日常生活での使用頻度が高い熟語に用いられることや、筆順を誤りやすいなどの理由から、漢字指導、書写指導によく取り上げられます。

また、学習指導要領の学年別漢字配当表に示された教科書体「発・登」の「発頭」が異なる接し方をしていることから（「発」は左右が離れる形、「登」は左右が接する形にデザインされている）、どちらの方がよいのか、それとも区別して書くべきかといった点において問題視されるなど、注目度が高い冠と言えます。

筆順は、字源にさかのぼって捉えることができます。「発頭」は、次の図のように、左右の足がそろっている姿で、篆書での書き順がそのまま楷書にも踏襲されているのです。

発頭の筆順



教科書体の「発」は、一画目と四画目の始筆が離れていますが、「登」は接しています。字源にさかのぼれば離れることとなりますが、書写の教科書などでは混乱を避ける意味で、「人やね」などと同様、両文字とも接する形で示されることが多いようです。

教科書体



書き文字



次号では、脚・沓について述べる予定です。